

私立大学研究ブランディング事業

29年度の進捗状況

学校法人番号	061002	学校法人名	東北公益文科大学		
大学名	東北公益文科大学				
事業名	日本遺産を誇る山形県庄内地方を基盤とした地域文化とIT技術の融合による伝承環境研究の展開				
申請タイプ	タイプA	支援期間	5年	収容定員	960人
参画組織	公益学部(公益学科)、大学戦略会議、研究活動推進委員会				
事業概要	<p>山形県庄内地方は「北前船寄港地」をはじめ文化庁の日本遺産に3件が認定されている。歴史的景観が数多く現存されている一方、踊りや民俗芸能等の無形文化財は少子高齢化や人口減少に伴い、新しい伝承手法と記録・保存方法が求められている。</p> <p>本事業では庄内の文化財について、社会科学的研究アプローチを基に情報技術で地域資源に新しい視点を創る研究を展開し、庄内唯一の4年制私立大学として地域の魅力創出と発信に貢献する。</p>				
①事業目的	<p>山形県では文化庁の日本遺産に3件が認定されており、そのすべてが庄内地域に位置している。歴史文化が数多く現存する庄内地域で、建物や風景など有形の文化財は歴史的景観として保存されている一方、踊りや民俗芸能等の無形の文化財は少子高齢化や地域の人口減少に伴い、新しい伝承手法と記録・保存方法が求められている。</p> <p>本事業では開学以来培った地域研究を基礎に、観光や創業につながる地域資源の掘り起こし研究を発展させていく。さらに、踊りや能等、人による「伝承」を必要とする庄内地域の無形文化財については、バーチャルリアリティ技術(VR)やモーションキャプチャ、CGアニメーション等、メディア情報の技術による新しい伝承方法を開発する。舞(黒川能・鶴岡市など)、踊り(酒田甚句・酒田舞妓など)、山伏修行(鶴岡市)、北前船航路(酒田市)等をIT技術でデータ集積し、さまざまメディアで発信の可能性を検討し、観光施設でのバーチャル体験等への応用についても研究する。</p> <p>本事業の取り組みにより日本遺産を庄内地域のさまざまな文化資源と結びつけ、情報技術を用いて付加価値を高めることで、新しい庄内の魅力発信につなげることを目的とする。</p>				
②29年度の実施目標及び実施計画	<p>■研究目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域資源の掘り起こしと分析について再検証 2. モーションキャプチャ等ITを活用した地域の民俗芸能の記録・試行 3. 民俗芸能の伝承環境構築の検討・試行 4. 地域資源を活用する人材育成プログラムの開発 <p>■ブランディングに関する目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランディング推進組織の立ち上げ ・東北公益文科大学のブランディングにかかる現状把握 <p>■研究に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域資源の掘り起こしについて、これまでの研究成果を共有し、その中からITを使って見られる化できる項目を抽出し整理する。 2. 地域の民俗芸能の素材を集め、ITを活用した記録材料を検討する。 3. 民俗芸能の伝承環境構築を検討し、モーションキャプチャを使って地域の民俗芸能の記録を開始し、試行する。 4. 地域資源を活用する人材育成プログラムの検討をする。 <p>■ブランディングに関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランディング推進組織を立ち上げる。 ・ブランディング推進リーダーを中心に各研究チームの実施計画と進捗状況、研究の方向性について随時確認する。 ・東北公益文科大学のブランディングにかかる現状把握のための地域住民アンケートを実施する。 				
③29年度の事業成果	<p>1.地域資源の掘り起こし分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化財のデジタル化の状況、また文化財をデジタル化するにあたっての課題や活用方法について、学内外で勉強会を行った。 ・地元酒田市及び周辺市町村の図書館、資料館等の文化財(紙媒体を中心に)の記録状況を確認するため、訪問ヒアリング調査を行った。 ・継続的に聞き書き等で地域活動を行ってきた鶴岡市加茂地区、酒田市日向地区をモデル地域として、デジタルコンテンツの収集に取り組み始めた。これまでのインタビュー形式での記録、紙媒体での保存以外にも、現在の行事等の動画撮影や古い写真のデジタル化などを通じて、地域資源デジタル化について理解を深めるため、数回にわたり地域との打ち合わせ等を行い、今後の研究計画について意見交換を行った。 				

	<p>2.モーションキャプチャー等ITを活用した民俗芸能の記録・活用 3.伝承環境構築 ・黒川能(山形県鶴岡市)の舞をモーションキャプチャーで記録することに初めて取り組み、そのデータをアニメーション化して黒川能伝習館(鶴岡市)にて記者発表することができた。 ・酒田市の港まつりの踊りである「酒田甚句」についても、テストデータ取得を行った。</p> <p>4.地域資源活用の人材育成 ・高校生以下へ提供するプログラミング講座を企画するため、学生スタッフの募集を行った。定期的に2,3年生を中心に10名程度の学生スタッフが集まり、平成30年度の6月から始まる小学生向けプログラミング講座の準備を進めている。平成30年度4月には新1年生へのプレゼンテーションも行った。</p> <p>全体について ・各コース横断の研究推進4チームを立ち上げ、毎月打ち合わせ会議を行うとともに、共通認識として必要と思われる勉強会を学内勉強会を4回、学外勉強会を6回実施した。 ・また本事業と連動し、さまざまな文化財のデジタル化について研究を行う研究所(文化財デジタル化研究所)をマルチプロジェクト研究機構内に設置した。これにより外部からの研究員を受け入れながら、研究を進めていく体制ができた。 ・地域住民アンケートについては、これまで地域活動に取り組んできた鶴岡市加茂地区・酒田市日向地区の住民を対象に、地域文化財の保存と伝承についてのニーズ調査とヒアリング調査を行った。</p>
<p>④29年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価) 採択直後から記者会見、マスコミ等への広報に力を入れてきた。 特に平成29年度は黒川能(山形県鶴岡市)の舞をモーションキャプチャーで記録することに初めて取り組み、そのデータをアニメーション化して黒川能伝習館(鶴岡市)にて記者発表することができた。これにはTV4社(NHK・さくらんぼテレビ・TUY・YTS)と新聞3社(朝日新聞・山形新聞・庄内日報)が取り上げ、大きなインパクトを与えることができたことは評価できる。 平成30年度に入り、酒田市の港まつりの踊りである「酒田甚句」についても、平成29年度のテスト収録を含め、2度のデータ取得を行った。鶴岡市の黒川能については演目を増やしていくことも検討しており、次年度へと繋げていきたい。 地域資源の掘り起こしについては、これまで地域活動等で交流を深めてきた鶴岡市加茂地区・酒田市日向地区をモデルに、新しい事業の取り組みへの協力体制ができている。両地区とも高齢化に伴い、小学校の閉校など、地域で大切にしてきた文化を次世代へ繋いでいくことに困難が生じている。この事業をきっかけに地域住民の中からも地域についての新しい関心が生まれ、地域文化の見直し・再評価が行われ始めていることは評価できる。 文化財のデジタル化の状況、また文化財をデジタル化するにあたっての課題や活用方法について、加茂竜一氏(一般財団法人 デジタル文化財創出機構 研究主幹)を講師とした勉強会を数回にわたり行った。先進地である秋田県大仙市アーカイブズを訪問し、意見交換できたことはスタートアップとして大変参考になるものであった。また、同じく平成29年度の私立大学研究ブランディング事業採択校である帝塚山大学 文化創造学科の牟田口章人教授を訪問し、文化財のデジタルアーカイブ化について、授業での取り組みや学生へのアプローチの仕方等についてレクチャーを受けた。このことにより、平成30年度当初から、学生スタッフの募集や授業での取り組みについてスムーズに行えたことは評価できる。 本事業と連動し、さまざまな文化財のデジタル化について研究を行う研究所(文化財デジタル化研究所)をマルチプロジェクト研究機構内に設置した。これにより外部からの研究員を受け入れながら、研究を進めていく体制ができたことは評価できる。</p> <p>(外部評価) ・マルチプロジェクト研究機構内に設立した「文化財デジタル研究所」に外部委員から参画してもらい、勉強会等で意見をいただいている。周辺市町の図書館、情報・企画担当者からも事業に対して関心を寄せていただいている。 ・黒川能のモーションキャプチャーでのデータ取り込みについては、地元地域からも高い評価をいただいている。データ収集に協力いただいた黒川能保存会からは「モーションキャプチャーのデータとCGアニメーションは、若い世代に舞を学んでもらうことに活用できる。役者としては、自分の動き、手の動き、身体全体のバランスの持って行き方が非常によくわかる。修得するには非常にプラスになるのではないかと考えている」とコメントをいただいている。 ・多くのマスコミに取り上げていただいたことは、本学のメディア情報コース並びに本研究への関心の高さを伺うことができる。</p>
<p>⑤29年度の補助金の使用状況</p>	<p>本事業の採択を受け、庄内地方の無形民俗芸能のアーカイブ化について、地域の民俗芸能をより高い精度で記録するため、下記の通り研究設備を購入した。</p> <p>①4Kビデオカメラを平成30年3月15日に購入 ②モーションキャプチャ装置を平成30年3月17日に購入 ③モーションキャプチャ操作用ノートパソコンを、平成30年3月6日、22日にそれぞれ一台ずつ購入 ④手軽に持ち運んで使用できるように、簡易モーションキャプチャ装置を平成30年3月26日に購入 これら設備を使用し、新たなデータの収集も行き、計画通りに研究のブランディング化を推進した。</p>